

美智子さま

81

一枚のお写真

ご養蚕の

お仕事



天蚕(てんさん)の種を和紙に25粒ほど貼り付けたものをクスノギの枝につける「山つけ」という作業を行われる美智子さま。

1980年代の写真 宮内庁提供



も手作りする。井上和子女官長（故人）によれば、蚕の温度管理に至るまで、あらゆる作業を、美智子さまは心を込めて丁寧に行なっておられるという。

こうした作業を経て生み出される絹糸は、宮中儀式や祭祀で使われる織物に利用されるのだが、小石丸には特別なエピソードがある。

正倉院では平成6（1994）年から、宝物である8世紀の古代裂を復元する計画があった。しかしそれには古代の糸に極力近い糸を使わなければならず、現在ある絹糸では太すぎたという。正倉院事務所が調べた結果、小石丸が最もふさわしいとわかったのだが、何しろ一般の養蚕農家はもう扱っていない。

唯一、皇居でのみ小石丸が育てられていたのだ。

美智子さまのご決断が宝物を救うこととなった。このことを美智子さまはたいそう喜びになり、平成11（1999）年の誕生日の記者会見では「御物の復元に役立てていただいていることを嬉しく思っています」と語っておられる。

今、美智子さまが心にかけておられるのは経験の継承であらう。初孫の秋篠宮眞子内親王殿下が初等科三年の折、社会科で「お年寄りの世代の手仕事」について調べる宿題があり、蚕の仕事のお手伝いをされた。その際美智子さまは眞子さまに大変心温まるお手紙をお出しになつており、その手紙は『皇后陛下喜寿記念特別展 紅葉山御養蚕所と正倉院裂復元のその後』において公開された。

「眞子ちゃんには紅葉山で見たいいろいろの道具をおぼえて

いるかしら。蚕棚の中の竹で

あんだ平たい飼育かごをひとつずつ取り出して、その中にいるたくさんの方々に桑の葉をやりましたね……（後略）」

眞子さまがご養蚕に関心をもたれたことを美智子さまはどんなに嬉しく思われたことだろう。「さすがは内親王ね」とほほ笑む美智子さまのお姿が目には浮かぶ。

文・渡邊みどり

わたなべ・みどり ジャーナリスト、文化学園大学客員教授。1934（昭和9）年、東京生まれ。早稲田大学卒業後、日本テレビ放送網に入社。皇太子成婚記念パレード以来、皇室報道に携わり、昭和天皇崩御特番では総責任者。本連載をまとめた「美智子さま 美しき人」が好評発売中。最新刊は、「美智子さまに学ぶエLEGANCE」（学研プラス刊）。



わたなべ・みどり ジャーナリスト、文化学園大学客員教授。1934（昭和9）年、東京生まれ。早稲田大学卒業後、日本テレビ放送網に入社。皇太子成婚記念パレード以来、皇室報道に携わり、昭和天皇崩御特番では総責任者。本連載をまとめた「美智子さま 美しき人」が好評発売中。最新刊は、「美智子さまに学ぶエLEGANCE」（学研プラス刊）。